

ク ト ウ ル フ の 呼 び 声

Call of Cthulhu

京都哀妖変

シナリオ集 by 偉鷹 仁

わら しおさい
嘲笑う潮騒

シナリオ2「嘲笑う潮騒わら　しおさい」

イントロダクション

1997年のゴールデンウィーク、探索者たちは休暇を利用して北海道の最南端、函館に来ていた。

その、数日前、通称「下海岸」と呼ばれている漁師町では、異変の予兆が現れていた。

が、異変というのは、ほとんどの人々が気づかなかつたに違いない。

というのも、それはむしろ、漁師町の人々にとっては望ましい事だったからである。

季節はずれの魚が、毎日、大量に網にかかり、石崎町の住民は活気に満ちていた。

むしろ、他の地域では、そのような事があろうはずもなく、獲れた魚には高値がつき、それが町の活気に、さらに拍車をかけていた。

この異変が起きる、ほんの数日前、ある老人が海岸に打ち上げられた貝を拾った事も、誰も知らない事実であった。

老人は、貝を拾い、その中の石を大事に持ち帰った。

そして、起こりうるはずのなかつた怪事件のまくは上がったのである。

プレイヤー用情報

プレイヤー・キャラクターたちは、様々な経緯で、ここ、温泉旅館「浪華館」に、泊っていた。

基本的にはプレイヤー・キャラクターたちは、それぞれ知り合いであり、旅館に滞在している。

他には、北海道大学ラグビー部の猛者3名と、サラリーマンの夫婦が一組、北海道大学の文学科助教授が一人。

旅館は基本的に、二組の夫婦が経営しており、子供は3人。兄夫婦が二人で、弟夫婦が一人、それに年老いた両親。あとは仲居が二人、住み込みで働いているだけである。

その旅館に訪れる人物のうち、一人目を引く者がいた。和服を着た

14~5才の少女で、名を鈴すずと言った。

鈴は恐ろしいほど整った顔立ちで、気立ても優しくかった。

山側の方に、祖父と住んでいるらしく、旅館に隣接している雑貨屋で、毎日生活用品や食料品などを買い求めているらしい(もし、探索者達のうち、誰かが彼女に優しくすると、彼女はそのキャラクターに恋をする可能性が60%あり、その場合は、彼女の方から積極的に会いに来る)。

山城 鈴　　15才? 女
身長162cm 体重38kg 血液型O型
(植物の血液型って大抵O型...)
生年月日1982年5月7日 牡牛座
ただし、祖父の言による。

交通事故により、3ヶ月前以前の記憶を無くしている少女。交通事故は半年前に起きた事実であるが、警察や市役所などで調べると、子供は当時3才であることがわかる。体が弱いとの理由で、義務教育も殆ど行っていないらしい。学校で聞くと、物静かな娘であるが、どこかどっつきにくいという評判であり、友達もいない事が判る。正体は人形師・山城大吾の作った人形である。

黒髪(ロング)で、黒瞳、色白の美少女である。事故当時の状況は、「事件の真相」を参照。

山城 大吾　　82才 男
身長168cm 体重53kg 血液型A型
生年月日1915年7月5日 蟹座
人形細工師として、人間国宝指定を受けている好々爺。

現在は体調を崩し、臥せている。探索者達が近づこうとしたときは、鈴の友人としてなら愛想良く、興味本位という形であれば非常に冷たく応じる。老人特有の「しばんだ」体格で頭頂の禿げ上がった白髪頭。

マスター用情報

その日の夜、事件は起きた。(もし、夜、散歩に出る様なキャラクターがいるのなら、その前でおこすべし)ラグビー部の部員、金山が、殺されたのである。死因は、頸椎骨折によるショック死。

目撃者の証言によれば、腰までのロングヘアをなびかせた女性らしきシルエットが、金山に突如襲い掛かり、後ろから、彼の首を両腕でひねり、殺したのだという。

そのあと、犯人は被害者の右胸に右手をねじ込み、肝臓を引き出して、「それ」を持ったまま逃走したらしい。

(返り血で、「彼女」の体は真っ赤に染まり、まるで)赤いレオタードを纏っているかの様に見えたと話す(実際は全裸である)。

殺人者は鈴なのだが、本人はこのことにほとんど気づいていない。

クトゥルフの呼び声

作成者の大吾は、気づいているのだが、それゆえ現在は寝込んでいる。

プレイヤー・キャラクターが、鈴の家にゆくと、外で見たとおり、和服を着た彼女が出迎える。

彼女は愛想よく家の中に招き入れると、和菓子と茶を出し、もてなしてくれる。が、どこことなく暗い雰囲気があった。

プレイヤー・キャラクターが、それについてたずねると、大吾の具合が最近良くないのと、もう一つ悩みがあるのだという。

山城家には、春だというのに、こげ茶のコート襟を立てて着、同色のソフト帽を目深にかぶった男がたびたび尋ねてきており、主の大吾と言い争いをしては帰ってゆく。

会話の内容は、大吾が海岸で拾った石を返してくれとのことらしい。

が、当然鈴はそれを知らず、「返せ」と責められても途方に暮れるばかりである。

大吾にこれを告げると、「うう...やはり、いや.....」とうめいて、また意識を失う。強引に聞き出そうとしても、ちら、と、鈴の方を見て話しづらそうにし、その後また倒れる。

探索者が晩まで山城家にいるなら、コートの男と出会う。男は「ゴボゴボ」と妙にくぐもった声で話し、あの手この手で鈴を脅すが、力づくに出ようとはしない。

探索者達が強く出ると、「ま`だ・ぐ`ゝる`（また来る）」と言い残し、さってゆく。

もし、探索者達が、男のソフト帽を取るなら、妙にぎょろつとした目と、皺だらけの太い首、そして扁平な顔面に驚き、SANチェックとなる。

この日の夜、再び殺人事件が起きる（探索者達が夜、外に出る時なるべくなら彼らが海岸線に出る時点で起こすと良いでしょう）。

探索者達が殺人事件を目撃すると、それは、どうみても等身大の木彫りの人形である。全身を朱に染めて.....。

その殺人人形は、信じられぬ跳躍力で探索者達の目の前から、住宅街の屋根から屋根へ飛び移り、山の方へと逃げていく。行く先には鈴の家があった。

やはり鈴は、今の事件は気づいておらず、うたたねして、気がついたら裸で自分の部屋にいたという状況である。

一方、コートの男とはまた別な男が鈴の周りで見かけられるように

なる。探索者達が捕まえると、それは同じ旅館に泊まっていた男で、名を大石良治といい、北海道大学の文学科助教授であった。

彼は、ある文献を探しており、その本の作者がこのあたりを立ち寄ったらしいという記録を頼りに、探し回っている。

その書物というのは「幽幻史」という本で、江戸時代末期の画家、高山修峰が記したといわれている、あやしものを解説した本であるらしい。

彼はその写本の一部を所有しており、その中には「魚人」という項目がある。さらに、以下のような意味不明の記述がある。

「樹齡二百年以上の赤松の樹液を月光に三日さらし浸すことで、その心にあつた体として定着させることができるなり」といった言葉が儀式の図解とともに載っている。

これを実践すると、鈴の体を本当の肉体へと変化させることができる。が、大石は見せるのをしぶるので、山城家にある数枚のページを見せないと、詳細は見ることができない。

探索者達が鈴を見張っていると、やはりまた鈴は夢遊病のようにさまよい歩き出す。

事件の真相

男の正体は、この辺り一帯の海底に棲む「深き者ども」であり、「石」というのは、彼らの神殿に祭られていた御神体の一部である。

・幽幻史

江戸時代末期の画家、高山修峰が記したとされる奇書。

120点もの妖怪・物の怪を扱い、図とともに解説しているが、その、あまりに真に迫る描写のせい、狂人の書とされ、23部が写本されただけに終わり、著者は原書とともに行方不明である。一説によれば、これを読んだ者が次々に変死したからという噂もある。

オカルト技能ロール5分の1で成功すると知っている。

掲載されているものとして、「空^かネズミ」、「不浄なりし綿毛」などがある。

・石崎町事件現場周辺

